```
以下、for(1~1000)で回していた所。→入力画像の部分を引数にとって1枚1枚でできるよ
うにする。
App.pyの中のformのところに新しい関数を作って、
Ilah.create_db(Cyan,./templates/IMG/Cyan.jpg)
llah.create_db(Magenda,./templates/IMG/Magenda.jpg)
llah.create_db(Yellow,./templates/IMG/Yellow.jpg)
という風にして、従来のllahの中のcreate_dbの機能を呼び出す。
#include <opencv2/opencv.hpp>
#include <llah/llah.hpp>
読み込むライブラリとしては、opencv2(すでにapp.pyで実装中になっている。)
Llah/llah.hppの部分に関しては作ってくれたクラス構造を一度に import できるようにし
てもらう。
Ilah::Database dbCyan((256)*5 + 27, 7, 6, 4);
Ilah::Database dbMagenda((256)*5 + 27, 7, 6, 4);
llah::Database dbYellow((256)*5 + 27, 7, 6, 4);
ここで、作成したLLAHクラスのDatabaseのインスタンスを生成している。
(Database::Database(size_t hashTableSize, unsigned int n, unsigned int m,
unsigned int I) {
  size_t elementSize = sizeof(double) * 2 + sizeof(DocumentID) +
sizeof(unsigned long long);
  _hashTable = new HashTable(elementSize, hashTableSize);
  _descriptorExtractor = new llah::DescriptorExtractor(n, m, l);}という構造になっ
ている。)
dbCyan.setRemoveRedundancy(false);
dbCyan.setSampleKeypoints(false);
dbCyan.setNumberOfKeypointsToSample(200);
dbCyan.setSampleFeatures(false);
dbCyan.setNumberOfFeaturesToSample(400000000);
dbCyan.setListLengthLimit(5000000000);
ここで、LLAHの諸々のパラメーターの設定をしている。
各色のFor文の部分の解析
(1)0詰をして、ファイルパスを指定している。
(2)imageという画像行列にファイルパスの画像を取り込んでいる。
(3) リサイズしている。
(4) vector< llah:: Keypoint > keypoints;
  Ilah::detectFeatures(image, keypoints);
  特徴点の抽出をしている。
(5) vector<cv::Rect> rects = llah::dividedRects(image, 4, 2);
   dbCyan.addDocument(keypoints, i, &rects);
   ここでは、特徴点の行列、画像id番号、&rectsこの引数はサンプリングのために、各
長方形領域の決められた個数だけ取るための指定。
```

(6)keypoints.sizeが特徴点の個数としてコマンドに出力されている。